

言語の違いが音楽の感得に与える影響

井戸 和秀 ・ 矢内 淑子*

我が国では、正式に音楽教育を受けるということは、西洋音楽を学ぶということと等しい。それは、伝統音楽が一部導入されるようになった現在でも真実である。特に、音楽大学や教員養成大学において、歌の学習といえば、イタリア語やドイツ語、英語等で歌うことが当然のこととなっている。それでは、多くの日本人は、歌われる外国語の意味や歌のイメージをどのように感得しているのだろうか。そこで、本研究では、歌を歌う際の言語の違い—ドイツ語と日本語—が聴取者に与える感得を調査した。その結果、シューベルト作曲「野ばら」をドイツ語で歌った場合には、言語の意味は不明ながら、概ね軽やかでリズムミクに、日本語で歌った場合には、言語の意味は漠然としながら、概ね柔らかで流れるように感得された。

Keywords：言語の違い，歌，印象，聴取者，音楽の感得

1 問題の所在

我が国の教員養成や音楽大学において、音楽を学ぶ場合、イタリアやドイツ、イギリスなどの音楽表現の様式と感性に依存している。したがって、足のステップによるリズム感や強弱アクセントの言語を基本とした学習内容となる。一方、日本人は、農耕民族であり、騎馬民族とは基本的に相違するリズム感と高低アクセントの言語を有する民族である¹⁾。これらのリズム感と言語の相違は、音楽の感得と表現に大きく影響する。つまり、強弱アクセントの表現では、リズム的であるのに対し、高低アクセント語では、旋律的で流れるような表現になる。このことは、従来から指摘されており、周知の事実として理解されていると言ってもよい。このため、日本に在住し日本語を話している西洋音楽を上手く表現できないため、明治以後、日本人は欧米に渡り西洋音楽の表現方法を学んできた。その努力の結果、音楽コンクールにおいて西洋人を押しのけて優勝できる人も出てきた。しかし一方では、日本語の特徴を尊重した音楽、特に歌を適切に歌えない日本人も出てきた²⁾。情報化社会のため地球が狭くなっている現在では、西洋人も日本人も区別する必要はないといってしまうまでもある。しかし、事の本質は簡単ではない。なぜならば、それは我が国の音楽教

育の根幹に関わるからである³⁾。

国際化や多文化理解が、地球規模で必要になってきた現在、わが国でも伝統音楽が具体的に日の目を見るようになった。このこと自体は非常に喜ばしいことである。そして西洋音楽と日本の伝統音楽とが融合し、弁証法的に発展できる素地ができたとみるべきかもしれない。しかし、日本の音楽文化は、明治以来、西洋音楽一辺倒の学校教育によって、音楽に対する価値観は簡単には変化しない。例えば、年末に歌われるベートーベン作曲の「第九交響曲」は、相変わらずドイツ語で歌われる。多くの日本人はドイツ語や英語で歌うと、立派ですごいことをしているように錯覚するらしい⁴⁾。このような状況に一石を投じた人たちがいる。1987年8月30日に三重県桑名市民会館ホールで「日本語の第九」が、なかにし 礼（作詩）と指揮の石丸寛によって初演された。演奏が終わって、指揮の石丸寛は、「これほどの感動的な第九をしらない」と言った。また演奏者も聴衆も、カメラマンも感動のあまり全員が涙したという⁵⁾。作詞者のなかにし 礼は、日本語にした経緯を次のように述べている⁶⁾。

「日本語で歌うと音楽の純度がさがるといふ。(中略) 音楽の純度という目くらましにくらんで、言葉をないが

しろにしはじめて、日本のクラシックは活力を失った。(中略)言葉というものは、生のものである。ギラギラと油ぎったものである。日本語にすると、その生々しさがよみがえり、音楽が油ぎって来るからいやだというのが本音だろう。音楽がわかってしまうのがいやなのだ。わかるのが怖いのだ。いつまでもわからないものとして遠くにおいておきたいのだ。(後略)」

我々は、偏狭な民族主義に陥るべきではない。しかし、演奏する音楽、特に歌の場合、真に自己の感性として感得・表現されるためには、言語の問題は避けて通れない。そこで本研究では、我が国でよく歌われるシューベルト作曲の「野ばら」が、ドイツ語と日本語で歌われた場合、それを聴く人はどのように感得するのか、つまり感情価を持つのかについて検討した。仮説としては、ドイツ語の場合には、軽やかでリズムミクな印象、日本語の場合には、なめらかで流れるような印象を聴取者に与えるだろうと考えている。本論文は、平成14年度秋季(11月23～24日)の日本音楽知覚認知学会において発表された内容に加筆修正したものである。

II 研究方法

ゲーテ作詩「Heidenröslein野ばら」は、シューベルトとウェルナーが曲を付けている。訳詩は近藤朔風である。これらの曲は、「高校生の音楽1」にドイツ語と日本語の訳詩とともに掲載されている。本研究では、シューベルト作曲を実験曲とした。その理由は、我が国でよく歌われているからである。なお、巻末に「野ばら」を資料1として、強弱アクセントを付けたドイツ語の詩と高低アクセントを付けた日本語の訳詩(一番のみ)を掲載した。

実験曲：野ばら(ゲーテ作詩・シューベルト作曲、近藤朔風訳詩)

実験曲の録音：テノールとソプラノの声楽家にドイツ語と日本語の一番の歌詞を歌ってもらい、録音した。順序は、テノールの男性にドイツ語で、続けて日本語で歌ってもらい、録音した。次に、ソプラノの女性にも同様に歌ってもらい、録音した。なお歌う際には、言語の特徴を意識して歌うように依頼した。

録音日時・場所：2002年7月1日、岡山大学音楽教室演奏ホール

被験者：専門学校生(女性360人、男性15人)、

岡山県内の小学校、中学校、高等学校、養護学校の音楽教員(女性81人、男性7人)、総数：463人

実験の手続き：①「今から、皆さんがよく知っているシューベルト作曲の『野ばら』をドイツ語と日本語で聴いてもらいます。一曲を聴いたら、配った用紙に自分が感じたままを書いてください」。

②「それでは、男性がドイツ語で歌います。」聴取後、「それでは、書いてください」。(書く時間は30秒)

③「それでは、次に男性が日本語で歌います。」聴取後、「それでは、書いてください」。(書く時間は30秒)

この後、女性の歌唱についても、男性と同様の実験を行った。

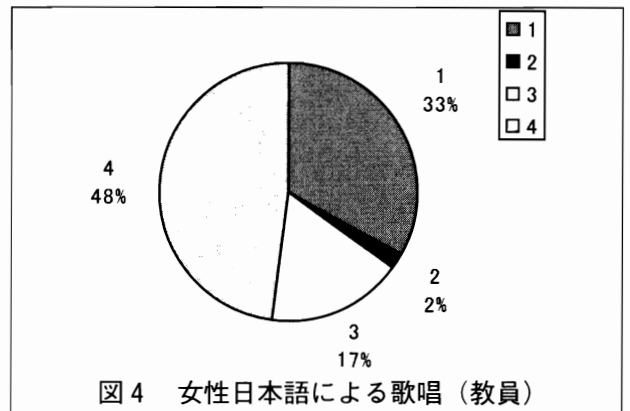
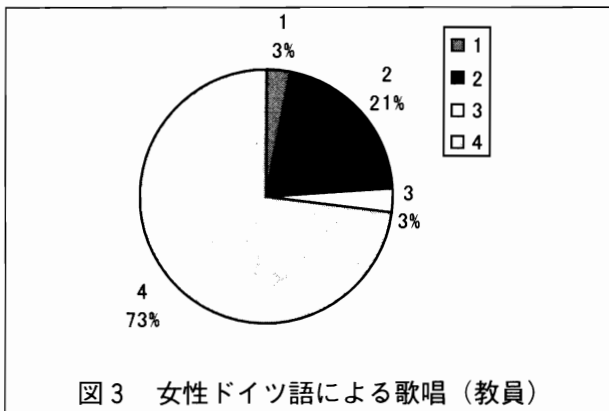
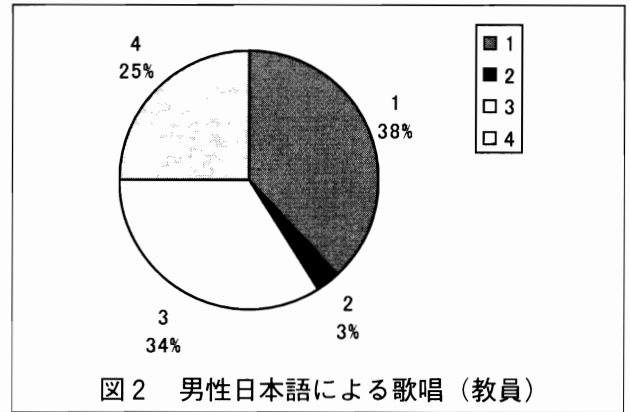
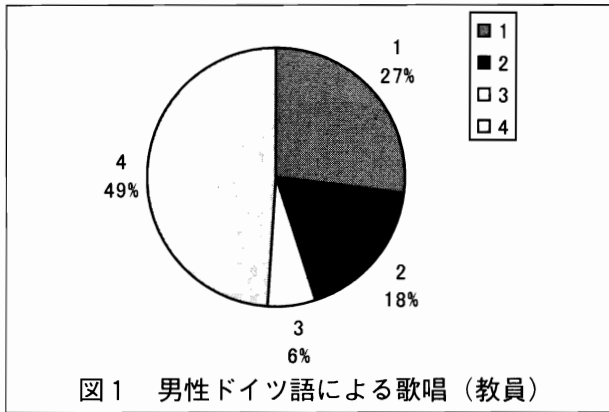
実験日：2002年8月、9月

記述方法：音楽作品を聴取した際の被験者が歌曲に対して感じた印象(気分反応)を自由記述式によって書かせた。このような研究に関する方法には、形容詞によるチェックリスト法、SD法、自由記述式などがある。本研究では、直感的な印象を主観的にどのように言語化するのかを調査したかったので、自由記述式を採用した。

分析の観点：自由記述の中から、ドイツ語と日本語の歌唱に関する印象語彙—特性語を抽出し、4つに類型化する。言語の特徴に関連しているものを1・2、漠然と歌曲の印象を表現したもので直接的でないものを「3. その他」、「その他」以外で特性語と認めがたいものを「4. 関連なし」とした。「その他」については、図1～4の後に掲載し検討することとした。なお「関連なし」は「大きな声」だとか「歌が上手い」など、感得とは直接に関連しないため、掲載しないこととした。

III 結果及び考察

ドイツ語は前述したように強弱アクセントを有し、子音言語である。一方、日本語は高低アクセントを有し、母音言語である。この両者の相違は、歌を聴取した場合、どのような印象を聴取者に与えるのだろうか。次に、図1～4として、その結果を示す。



印象語彙（括弧内は件数）

図1：ドイツ語の場合

1. 力強い(3), 固い(6), 堂々(2), きびきび(1), どっしり(1), 元気(1), 重い(1), 力がみなぎる(1)・・・総数26件
2. 軽快・リズムカル(10), 歯切れ(2), きらきら(1), ぽつぽつ(1), 勢い(1), 生き生き(1)・・・総数16件
3. その他・・・総数5件
4. 関連なし・・・総数93件

図2：日本語の場合

1. 伸びやか(8), やわらかい(7), なめらか(5), 粘り(4), しっとり(2), 流れている(2), おとなしい(2), きれい(1), まぬけ(1), まろやか(1), ゆるやか(1), 丸い(1), 長い(1), 優雅(1)・・・総数37件
2. 暗い(1), 深い(1)・・・総数2件
3. その他・・・総数30件
4. 関連なし・・・総数20件

図3：ドイツ語の場合

1. はっきり(3)・・・総数3件
2. 軽やか・リズムカル(3), 歯切れ(3), ひとつひとつの音の響き(1), 生き生き(1), 走りながら(1), 躍動感(1), 踊り(1)・・・総数21件
3. その他・・・総数3件
4. 関連なし・・・総数65件

図4：日本語の場合

1. なめらか(6), やわらかい(6), しっとり(5), ゆったり(4), 伸びやか(4), やさしい(4), 大きなフレーズ感(1), 落ち着いた(1), しつこい(1), ねばり(1), まったり(1), ゆっくり(1), 優雅(1)・・・総数36件
2. 哀しい(1), 重い(1)・・・総数2件
3. その他・・・総数15件
4. 関連なし・・・総数42件

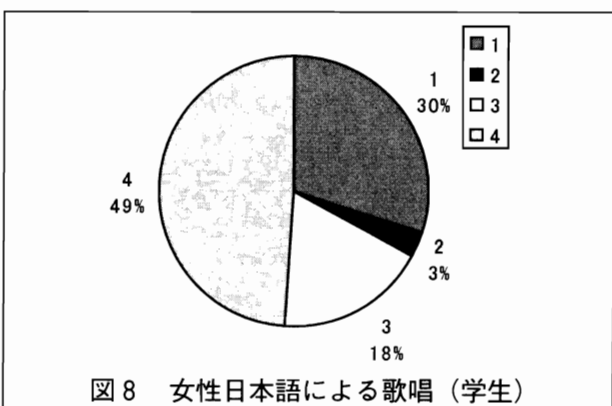
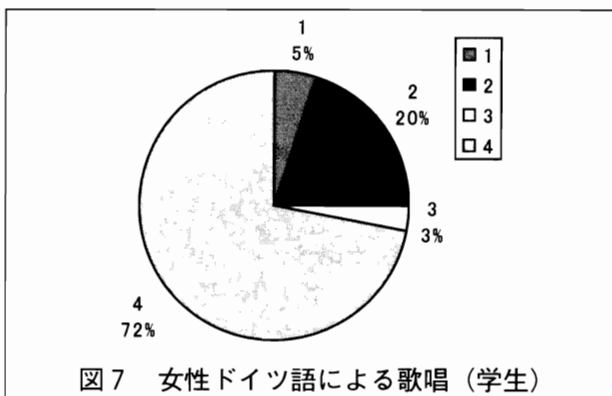
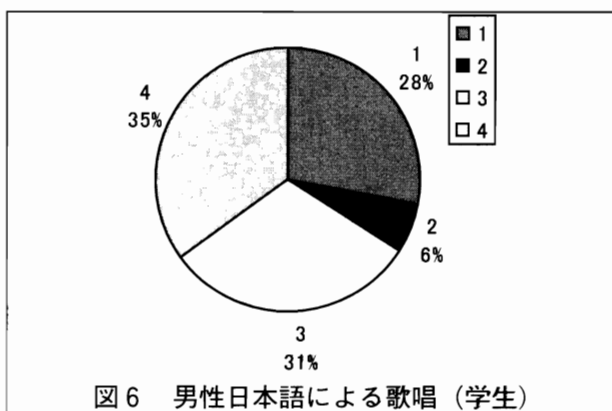
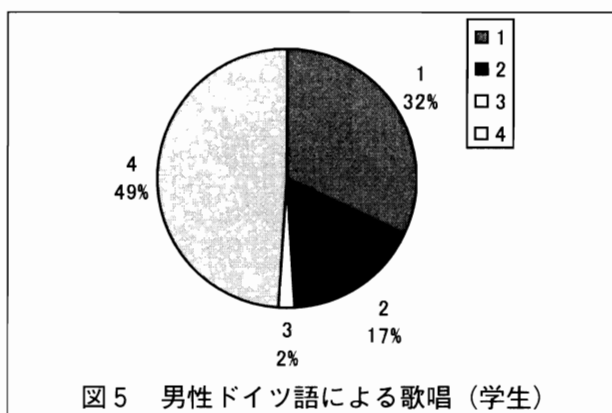
図1から分かることは、男性が歌うためかドイツ語の重厚感（27％）が感得されている。同時に、軽快さも（18％）感得されている。この軽快さは、ドイツ語のアクセントによるリズム感が影響していることが考えられる。総じて言えることは、男性がドイツ語で歌った場合、重厚感が感得されると言うてよいだろう。一方、男性が日本語で歌った場合には、図2から分かるようにドイツ語の重厚感が全くなく、やわらかさ等（38％）が感得されている。同時に、暗い等の感じ方が少しではあるが感得されている。以上のことから、ドイツ語と日本語で男性が歌った場合には、明らかに言語の違いが音楽の感得に影響していることは明白である。それでは、女性がドイツ語と日本語で歌った場合には、男性と同様な結果になるだろうか。

図3を見ると、男性がドイツ語で歌った場合の重厚感は全く感得されていない。子音や軽快さ（1と2を合わせて24％）が主として感得されている。しかし、それは、男性の重厚感（27％）より少ない感得となっている。ドイツ語を男性と女性が歌った場合、歌のイメージを決定する要因として、声質が主になっていることが分かる。また、男性と女性とで特徴的なことは、男性がドイツ語で歌った場合より、女性がドイツ語で歌った場合の方が「関連なし」が49％から73％になっていることである。これは、歌を歌うという行為が、男性より女性が歌う方が、音楽の感得というレベルではない別の要因を引き出していることが伺える。それは、例えば、女性が歌った方が聴きやすいとか、女性の方がよいとか等である。このことは、歌うという行為が日本における社会的な行為としての性差が存在しているように考えられる。

それでは、女性が日本語で歌った場合には、どのように感得されるのであろうか。図4から分かることは、男性と同様に日本語特有のやわらかさ（33％）等が感得されていることである。また、若干ではあるが男性で感得された「暗さ」に類することは、女性の場合にも同様に若干存在している。さらに、男性が日本語で歌った場合の「関連なし」が25％から48％へ増加していることは、男性がドイツ語で歌った場合ほどではないにしても、歌うという行為が男性より女性の方に社会的認知度等が高いのかもしれない。

以上、図1～4までの感得の特徴を見ると、言語や男性、女性の違いが感得の違いに密接に関連していることが分かる。それでは、音楽教員以外においても、このような感得の違いは生じるのだろうか。次に、音楽を専門としない福祉系の専門学校生によ

る図5～8の実験結果を示す。



以上、図1～8までのグラフを比較すれば、音楽教員と福祉系の専門学校生とは、同様な感得の仕方

をしていることが分かる。このことは、ドイツ語と日本語とにおける感性の違いが、年齢差や音楽の専門教育を受けたかどうかとは、あまり関係がないことを示している。この結果は、日本人としての一般的な感得の仕方として認められるのではないだろうか。ドイツ語で歌われる場合、聴取者はドイツ語の重厚感を感得する一方、リズム感が強調された軽やかな印象も歌に対して感じている。日本語の場合には、歌詩は分かりにくい面もあるが、やわらかさを主として感得し、一種の暗さも聴取者は感じている。

それでは、感得の仕方の中で、歌に直接に感じるのではなく、付随したものについて検討してみる。そうすることで、ドイツ語と日本語との感得の違い、性差の違いが明らかになるはずである。そのために、「その他」のところで、被験者が自由記述をしたものを検討してみる。なお、被験者は総数463人であり、そのうち音楽教員は88人、福祉系の専門学校生が475人である。そのため、自由記述の数が専門学校生の方が音楽教員より上回っている。しかし、内容を吟味すると、音楽教員より専門学校生の方が感性豊かに「野ばら」を感得しているようにも考えられる。

「その他」

音楽教員

①男性ドイツ語

- ・日本語でないため、綺麗な音楽。原曲という感じがする。ドイツ語の発音が耳に残る。やわらかなドイツ語、ドイツ語が美しい。

②男性日本語

- ・日本語の方が歌っている人も感情がこもっている。日本語だけど歌詞が聴き取りにくい。歌詞の意味も分かり、その風景をイメージして聴くことができる。日本語でも何か違う。専門の言葉じゃなくて感情があまりはっきりしない。日本語じゃなくて外国の言葉みたい。童謡みたい。日本語よりドイツ語の方が感じが出る。歌詩の内容に耳がいく。硬くてバラのつばみを感じる等。

③女性ドイツ語

- ・やさしい感じのドイツ語。綺麗なドイツ語。高貴なバラの感じ。

④女性日本語

- ・日本語がよく分からない。言葉が分からない。ハミング・スキヤットのような。歌詩が聴き取れず綺麗だと思うけど歌という感じがしない。ドイツ語と違って野ばらを部屋の窓からじっくり見ている印象。日本語的でない。ドイツ語で聴くより情景が想像しやすく、高貴で美しい感じ。ドイツ語より親近感を感じる

等。

専門学校生

①男性ドイツ語

- ・何を言っているのか分からないけど、聴き取りやすかった。高級そうな感じ。ドイツの田舎の町並みにいるような気分。時間がゆったりと流れている感じ。歌詩は分からないが、曲想を感じる。朝、鳥が羽ばたいている感じ等。

②男性日本語

- ・日本語の方が力強く聴こえる。聴いて理解できる。夜空を見上げながら踊っている様子。つぶやいている様子。日本語とドイツ語では感じが違う。日本語はあまり聴き取れない。日本語の方が聴きやすい。日本語だから野ばらの曲が分かる。力強い感じ。本当に野ばらの感じ。楽しい感じ。ドイツ語の方が曲に合う。いつもドイツ語で聴いているので変な感じ。日本語と思われない。男女が向き合って話をしている感じ等。

③女性ドイツ語

- ・バレエで小柄な女性が踊っている感じ。大草原で少女たちが優雅で踊っている。オペラみたい。すごく愉快な歌。野ばらをイメージするような綺麗な感じ。高級レストランで聴く歌。モーツァルトの「フィガロの結婚」を思い出した。綺麗、妖精がはねながら回っている感じ。ドイツ語の方が日本語より明るい感じがする等。

④女性日本語

- ・日本語で女性なので聴きやすい。綺麗な歌声で広大なイメージ。日本語の方がよい。聴き慣れているので綺麗。ドイツ語よりしっくりくる。野ばらとは違う感じに聴こえる。ヨーロッパの大草原みたい。風に草木が揺れている感じ。家に帰る感じ。夕日が沈む感じ。迫力なし。ドイツ語の方が綺麗。気持ちがこもっている。日本語が聴き取れない。みんなで楽しく歌っている感じ。一緒に歌いたくなる感じ。ドイツ語と日本語とでは全く違う歌に聴こえる。日本語の方が聴き取れない。休日のゆったりした午後に聴きたい。言葉が分からないので、詩の内容が伝わらない。日本の昔の歌みたい。日本語で歌っている感じがしない。子守歌みたい。野ばらの様子が分かる。ドイツ語よりテンポが遅く感じる。ドイツ語のような軽快さが無い。オペラみたい。日本語で歌わない方がよい等。

音楽教員の場合、歌った経験や聴取経験が多いためか、ドイツ語に対して、ある程度「野ばら」に対する認知体制ができていることが上記の①③の自由記述から分かる。例えば、①③において、「日本語でないため、綺麗な音楽」とか「原曲という感じがする」「ドイツ語が美しい」「やさしい感じのドイツ

語」などは、ドイツ語と音楽との密接な関連を感得していることを示している。一方、音楽教員において、男性日本語の場合には、「日本語の方が歌っている人も感情がこもっている」「歌詞の意味も分かり、その風景をイメージして聴くことができる」反面、「日本語だけど歌詩が聴き取りにくい」「日本語でも何かが違う」「日本語じゃなくて外国の言葉みたい」、女性日本語では、「ハミング・スキヤットのよう」「日本語的でない」「ドイツ語より親近感を感じる」など、まるで逆の感得の仕方をしている。これらの一見矛盾する感得の仕方は、ドイツ語と密接に結びついた歌に対する感性と日本人・日本語であるための感性が混在した感じ方と考えられる。特に、興味深いことは、「日本語じゃなくて外国の言葉みたい」という感想である。これは、発声方法が頭声発声であるため、母音言語である日本語が聴き取りにくいことと、ドイツ語訛りの日本語であるためだろう。ここに、原語で歌うことの絶対的な意味が存在する。その国の言葉に作曲された音楽は、その言葉の抑揚だけでなく、リズム感や全体の印象を形成する。そのことがその音楽の特徴となる。したがって、同じ旋律に違う言葉が付された場合、全く逆の印象を聴取者に与えることになる。

歌に付随する感得の仕方は、福祉系の専門学校生においても、音楽教員と同様な傾向があることが分かる。専門学校生の①から④までの内容は、音楽教員より多くの言葉で、ドイツ語と日本語との違い、性差の違いを見事に表現している。特に、専門学校生の感想の中で、「ドイツ語よりテンポが遅く感じる」という内容は、ドイツ語のアクセントによるグルーピングを示しており、非常に興味深い。つまり、アクセントがあれば他のシラブルはアクセント語にまとめられ、リズム集団を形成する。その結果、旋律にリズム上の凸凹ができ、その音楽的特徴であるテンポ感を創る。ところが、日本語の場合には、高低アクセントのため、リズム上の凸凹ではなく、高低の凸凹が生じることとなる。その結果、テンポ感を形成するよりも旋律感を形成するため、日本語の方がドイツ語よりテンポをゆっくり感じるることとなる。ここに、ドイツ語と日本語における音楽の基礎を形成する重要な要素が存在する。

以上の知見から、最初に述べた仮説は実証された。それでは、シューベルト作曲「野ばら」は何語で歌わせるべきだろうか。それとも日本語でも歌わせるべきであろうか。当然のことながら、筆者たちはドイツ語で作曲された「野ばら」は原語で歌われるべ

きであると考え。日本語は対訳として参考に付されるべきものである。

今後の課題として、次のようなことが考えられる。

第一は、「野ばら」の実験結果は、強弱アクセント語と高低アクセントを有する言語に共通する本質的な問題であるのか。第二は、なかにし 礼が、ベートーベン作曲の「第九交響曲」に付した日本語と「野ばら」の日本語の違いは何か。第三は、ドイツ語の曲に日本語を付した場合、演奏の仕方つまり表現方法を替えることで、ドイツ語と同様な表現を達成できるのか等である。

註

- 1) 『風土』の著者、和辻哲郎によれば、人間存在の空間的・時間的構造は風土性歴史性として己を現してくる、と述べている。岩波書店、1975年、p.15.
- 2) 1987年9月23日の朝日新聞に次のような記事が載った。ある日本人のソプラノの女性が日本の童謡を歌った際、共演した人の談話である。それは、「清潔だし、日本の声楽家が歌う時の欠点である不自然さがない」という内容であった。これは、日本の音楽教育の基本的な問題を提起している。つまり、日本人であれば、日本の童謡が歌えるのが当然なのに、日本の声楽家が歌う時の欠点である不自然さがない、ということは、いつもは外国語で歌っているため、自然な日本語の発音ができないということであろう。このような音楽教育が教員養成や音楽大学で実施されているとしたら、一刻も早く是正されるべきである。この記事は15年前のものであるが、現在でも多くの大学では基本的な改革は行われてはいない。
- 3) 日本語に即した音程構造は長2度であり、英語やドイツ語では短3度である。また日本語の高低アクセントは、主に旋律を構成するのに対し、英語やドイツ語のような強弱アクセントはリズムを構成するのである。ここに、言語の相違による基本的な差異が存在する。
- 4) 感情は、社会性を帯びたものであるということ。そこには通文化的な普遍性がある。池田謙一・村田光二『こころと社会— 認知社会心理学への招待』東京大学出版会、1991年、pp.166-167.
- 5) 『ショパン』No.46、東京音楽社、1987年11月。
- 6) 楽譜「歓喜の歌」の中で、なかにし 礼が序文の中で述べている。東京音楽社、1987年8月。

資料1

Heidenröslein

ドイツ語の斜線は強く発音

日本語の横線は高く発音

D.257

野ばら

J.W.von Goethe

Franz Schubert

Lieblich (♩ = 69)

First system of the musical score. It features a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line has the lyrics: "Sah ein Knab ein Rös - lein stehn, Rös - lein auf der Hei - den." Below this, the Japanese lyrics are written: "1. わ ら べ は み た り の な か の は ら". The piano accompaniment starts with a *pp* (pianissimo) dynamic marking.

Second system of the musical score. The vocal line continues with: "war so jung und mor - gen - schön, lief er schnell. es nah - zu - sehn,". The Japanese lyrics are: "き よ ら に さ - げ - る そ の い ろ め, - で - つ". The piano accompaniment continues with the same texture.

Third system of the musical score. The vocal line has: "sah's - mit - vie - len - Freu - den. Rös - lein, Rös - lein, Rös - lein - rot,". The Japanese lyrics are: "あ - か - ず - な - が - む く れ な い に お - う". The piano accompaniment includes a *cresc.* (crescendo) marking and a *pp* marking. The word *nachgebend* is written above the vocal line.

Fourth system of the musical score. The vocal line has: "Rös - lein auf der Hei - den." The Japanese lyrics are: "の た か の は - ら". The piano accompaniment continues with the same texture. The word *wie oben* is written above the vocal line.